千里の鳥・万博の鳥

A4版第59回

『カイツブリ』

カイツブリは体長が26㎝と小さく、潜ることが上手な水鳥、ため池や河川などの淡水域で一年中生息している。危険を感じたりして水に潜ると、10～15秒後、15～20mほど離れた所に浮き上がる。通常、水に潜って、餌の魚類・甲殻類をとり、水面に浮かんで飲み込んでいる。

今月の写真はカイツブリがトンボ（ギンヤンマ）をくわえている珍しい写真である。トンボは飛んでいる昆虫類を餌にしているが、獲物を探して水面すれすれに飛んでいた時、たまたまカイツブリの近くを通ったため、あっと思う間もなく捕えられたのだろうか。飛翔力は昆虫の中でも有数のトンボとしては、それほど俊敏と思われないカイツブリにつかまって、非常に悔しがっていると思われる。

カイツブリはガマやヒシ、スイレンやハスなど水生植物のある池に住み、繁殖時には水草や杭などの水面に、枯れ草・枯れ葉を積み重ねて巣（浮巣）をつくる。先月の万博探鳥会では、日本庭園はす池でスイレンを土台にした浮巣から、生まれたばかりのヒナを見ることができた。

種　名：カイツブリ（ギンヤンマを捕食）
撮影日：2016年8月19日/撮影場所：万博公園
撮　影：有賀憲介

カイツブリは昔から人の近くにいたことから、鳰（にお。カイツブリの古名で、水に入る鳥）と呼ばれて親しまれてきた。カイツブリの浮巣には「鳰の浮巣」、またカイツブリなど水鳥が多かった琵琶湖は「鳰の海」と呼ばれていた。

カイツブリとカルガモなどのカモは、ともに池や川など水辺に住んでいるが、生活様式が違っている。カモは水面に浮かんでいることもあるが、地上に上がって休んでいることも多いのに対し、カイツブリは一日中水面・水中にいて地上に上って休むことがない。カモは重心に近い体の真ん中に足があるので、歩くことができるが、カイツブリは足がお尻に近い後ろの方にあり、地上に立つとき体重のバランスがとりにくいためで、地上を歩くのを見たことがない。カイツブリが俊敏さを売りもののトンボをとらえることができるのは、地上は苦手でも水上にいるカイツブリは俊敏であり、水面すれすれに飛んで近づいたトンボを、一口にパクッと捕捉できるものと思われる。

日本野鳥の会大阪支部主催・万博公園定例探鳥会

日頃騒々しいヒヨドリも、夏の間は林の主役をクマゼミに任せているなど、夏は鳥たちが静かにしていて観察しにくい季節である。そんな中、水辺の鳥、カワセミ・カイツブリ・カルガモなどは元気な姿を見せてくれると思われるので、それらの鳥との出会いを楽しみに公園内を一巡する予定である。

①

▽日時…8月12日（土）9時30分～15時▽集合…自然文化園中央口▽解散…日本庭園の予定▽担当…足立道成氏他▽持ち物…筆記具・名札・弁当、あれば双眼鏡＊熱中症対策の水分を充分に▽服装…ハイキングと同じ▽参加費…会員100円・非会員200円、他に、万博公園入園料250円が必要

②吹田野鳥の会主催探鳥会予告

『高槻萩谷公園タカ渡り観察会』

日時…2017年9月23日（土・祝）8時40分～11時30分

問合せ：090-6901-1425（平軍二さん）
メール：g-hira@nifty .com